



TITLE:

本学雑誌目録出来る 京都大学学術
雑誌総合目録 自然科学欧文編 1965
354p

AUTHOR(S):

CITATION:

本学雑誌目録出来る 京都大学学術雑誌総合目録 自然科学欧文編 1965
354p. 静脩 1965, 1(4): 7-8

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36254>

RIGHT:

——蟹江博士の遺稿保存を託さる——

このほど、蟹江義丸氏の遺族から、博士の名著「孔子研究」の原稿をはじめ、幾多の論文原稿、校正刷り、論文の掲載された当時の雑誌、ノート、メモ等を、人文科学研究所島田助教授を通じて、本館に保存方が依頼された。蟹江博士は、今から60年も前になくなった方なので御存知でない方も多いと思われるので、ここにその略歴を紹介する。

博士は、明治5年富山に生れ、同27年東京帝国大学哲学科に入学、同30年7月に卒業した。生来の蒲柳の質と、日夜の勉学がたたって、早くから結核におかされ、明治30年に京都で静養しつつ、真宗大学の講師をつとめたこともある。同31年、病勢の小康を得て帰京し、ただちに東大大学院生となり、かたわら、早稲田専門学校に教弁をとつた。早くから祖父基徳氏の影響を受けて、東洋倫理思想の研究に志し、大学院生となるにおよんで、孔子の哲学思想研究に没頭した。この間にあらわされた「孔子研究」は、博引傍証、しかもよく自説をのべた、まれに見る名著といわれ、これによつて文学博士となつた。

この論文については、本学の貝塚茂樹教授も高く評価され、教授の著書「孔子」(岩波新書65)に次のように紹介されている。

「蟹江博士の『孔子研究』は明治時代において、従来の和漢の研究を集大成した名著であつた。その学術的価値は、今でも決して落ちない」と。

この「孔子研究」の他、日本の哲学研究史に名をつらねる井上哲次郎、深作安文、藤井健次郎等と協力して、当時の学界に大きく貢献した書物をいくつも作りだした。大小の論文は、「哲学雑誌」「東洋哲学」「倫理界」その他の雑誌に数多く掲載された。明治33年東京高等師範学校の教授となつたが、宿病は次第につり、同36年より沼津の地に静養した。しかし病中なお勉学をやめず、

「星月のめぐりめぐりて止らぬ心を己が心とものがな」

と詠じつつ明治37年6月になつた。年僅かに33。

今般寄せられた遺稿類の中には、上記の論文原稿のほかに、博士が活躍中より交友した人々で、後に有数の学者となつた人々の私信が多く含まれており、博士の人柄とともに、忘れられようとしている明治時代の、特に気鋭の学者達の生活、風潮を伺い知るよすがともなるので、下にこれら私信の発信人を列举する。

姉崎正治、星野 恒、深作安文、藤岡勝二、紀平正美、岸本能武太、桑木敏翼、松本亦太郎、諸橋轍次、元良勇次郎、中島力造、南日恒太郎、岡田正之、小西重直、田部隆次、高島平三郎、建部遯吾、得能 文、友枝高彦、塚原政治、綱島栄一郎(号：梁川)、宇野哲人、内田銀蔵、吉田賢竜、吉田熊次。

——本 学 雑 誌 目 録 出 来 る——

京都大学学術雑誌総合目録 自然科学欧文編 1965 354 P.

2月に刊行されたこの目録は、京都大学所蔵雑誌のうち欧文で書かれた自然科学に関するもの5238種を収録したものである。この種の目録は昭和18年に刊行されたまゝで、その後は期待されながらも種々の事情で出版されなかった。今回の出版は一昨年文部省から、全国学術雑誌総合目録(未刊行)を編さんするために調査を依頼されたさいに、各部局図書掛の協力によって収集したカード目録を原稿として編さんしたものである。

長らく日の目を見なかったこれらのカードから急に編さんしたために、記述様式が不統一であったり、排列が前後したり、ロシア語の翻字が ISO (International Organization for Standardization) に従ったものもあれば、ALA (American Library Association) に従ったものもある。また行の末尾のシラブルの切り方なども、紙面の節約のため機械的に切っているのを見苦しい点も少くない。

しかしこの目録は自然科学の研究者にとってかなりの負担になっている学術雑誌の所在調査の労力を少しは軽く、また購入雑誌選択上の参考にもなりうるであろう。今後記述上の誤りや、掲載もれ、あたらしく購入を始めたものなどを逐次追加訂正する補遺版を刊行するとともに来年度以降ひきつづいて、人文科学欧文篇及び人文・自然の和文雑誌目録も計画されている。

館内めぐり

図書団地住宅難の嘆き

書庫掛

本学のすべての図書が受入掛で入籍され、その性格や役割が目録掛で評価されて、利用者に知識と情報を提供する奉仕者に育成されるとすれば、書庫掛はこの奉仕者に快適な住居と環境を与える団地の管理者であろう。

書庫という名のこの団地は本館では床面積 820 余坪の新、旧 2 つの書庫よりなっている。床面積 430 余坪の旧書庫は本館の蔵書 40 余万冊の内約 12 万冊と部局図書 13 万余冊の保存書庫として使われている。新書庫は床面積 399 余坪、そこに延長 825.950 cm の書架が設置されている。この書架上に日夜利用者に奉仕する 28 万余冊の図書が、びっしりと排架されて、住宅難を嘆いている。ぼう大なこの図書群から破損図書や汚損したラベルを探し出すことは相当疲れる。架上図書の排列整頓、ラベルの更新、和装本の入帙、題簽書入等も楽ではないが架上の図書を排列を乱さず、大量に移動することは全くの重労働である。しかし、どんな近代的図書館でも架上図書の移動は人間の原始体力による外はないであろう。

本館が最も誇りとする貴重書や、特殊文庫の災害対策は頭の痛い問題であるが、雑誌・新聞の製本、図書の修理等もまた大きな重荷である。現在、和洋の雑誌・新聞の種類は洋雑誌 592 (寄贈 572) 種、和雑誌 1,681 (寄贈 1,570) 種、計 2,273 (寄贈 2,142) 種、寄贈の欧字新聞 16 種、邦字新聞 69 (寄贈 57) 種である。予算の関係上全部を製本することができないので、学術的価値と利用度とに重点をおき昭和 38 年度には和洋の雑誌・新聞を計 395 種 787 冊を製本し、破損図書計 288 種 546 冊を修理した。ところで、ときどき製本期間のおくれが批難されるが、雑誌が製本されて利用者の手許に届くまでには会計的处理の外、種々の事務的手続を経なければならない。利用者の不満もよくわかるが、この間の事情も了承していただきたい。

…あとがき 閲覧室の窓からさし込む日の光に、もう十分春が感じられる。そして今年も多くの人が卒業されるが、先ずその人たちに「オメデトウ」を申し上げよう。しかし、そうはいうものの、今まで閲覧室においておもしろいおもしろい姿体で読書されていたものが、急に消えるとなると喜びの中にも一寸淋しいものを感じる。卒業後は、学んでこられた理論的なものを実践へと移してゆかれるのであろうが、図書館で学習されたものも大きく役立ててほしいと願うとともに、そのことから今後図書館がより利用しやすいもの、学習によってより高いものを得られるよう図書館的な配慮の必要性を改めて考えさせられる。私達自身のどのような努力があつたとしても、その中に利用される方々の声が反映されていなければ、正しいサービスとはならないことも自覚しよう。

願わくば習慣として、卒業を期に後輩へ申し送られるいくつかの事項の中に、図書館のことが一つでもあればと思う私達である。(M・F)